

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 25 日現在

機関番号：32642

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720042

研究課題名(和文) 戦間期地域主義思想の比較研究 - 汎ヨーロッパ構想、アジア主義、ユーラシア主義

研究課題名(英文) A Comparative Study on Pan-regionalism during the Interwar Period: Pan-Europeanism, Pan-Asianism, Eurasianism

研究代表者

浜 由樹子 (Hama, Yukiko)

津田塾大学・付置研究所・研究員

研究者番号：10398729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)： 戦間期に相次いで出現した地域主義構想や汎イズムには、ナショナリズムや地域主義が複雑に絡み合った状態で含まれる。本研究では、その思想・イデオロギーが、従来のような「(狭量な)民族主義対(平和共存的な)地域統合」といった二項対立では捉えきれないものであることを明らかにし、ナショナリズムの極端な一形態として理解されてきた汎イズムの再解釈に辿り着いた。

また、汎イズム提唱者同士の交流・ネットワーク形成の様子をグローバル・ヒストリーの枠組の中で描き出し、学会等で高く評価された。

研究成果の概要(英文)： Generally, the relations between Pan-isms and regionalism are perceived in a typical dichotomy of "narrow-minded nationalism v.s. peaceful regionalism." However, as this project found out, Pan-isms appeared in the interwar period contain these elements in a more complexed way.

Also, as a result of the project, the author described the networking and interchanges of several Pan-movements in a framework of global history, which was highly estimated in a convention as fashionable and stimulating.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：汎イズム 地域主義 戦間期 ユーラシア主義 アジア主義 汎ヨーロッパ

1. 研究開始当初の背景

汎イイズムは従来、帝国主義と結び付いた極端なナショナリズムの一形態として理解されており、19世紀後半をプロト・タイプとする理解を越えた考察はほとんど存在しなかった。H.アーレントや H.コーンを始めとするきわめて影響力の強い先行研究が、汎イイズム理解の雛形を作ったことが理由の一つであるが、しかし、19世紀後半のドイツやロシアに見られた汎イイズムが、戦間期や1950年代に隆盛をみた汎イイズムと同質であるとは考えにくい。汎イイズムは、上記のような固定化されたイメージゆえに、そもそも歴史的考察対象として取り上げられることが稀であるが、その思想が持つ特性を、歴史的条件下でより掘り下げて理解するに値するテーマでもある。

また、複数の汎イイズムの発生を通時的に追ひ、カテゴリー化を試みた Louis Snyder の先行研究は存在しても、複数の汎イイズムが現れる特定の時代の特性、共時性を見据えた研究は見当たらない。さらに、同時期に生まれた汎イイズムの水平的連携、活動家のネットワークから捉える視角は、汎アジア主義と汎イスラム主義の接触を論じた Cemil Aydin の研究を除いて、研究開始当初にはほとんど見られなかった。

2. 研究の目的

このような研究状況に対して、本研究は、汎イイズムの再検討、歴史的背景の下でそれがどのような意味を持っていたかに関する再解釈を提起した。具体的には、戦間期に観察された汎イイズムの隆盛現象に着目した。西欧起源の国民国家、ひいては西欧国家体系への批判を鋭く打ち出す地域再編の構想が次々と現れた戦間期というにおいては、汎イイズムは19世紀後半のそれとは質的に異なる意味を持つことを仮説として、これを実証的に検証することを、本研究計画は主目的とした。

さらに、汎イイズムを提唱した活動家や思想家たちの相互交流から、それらの構想が持っていた共通項を抽出すると同時に、差異や矛盾を描き出し、より立体的な比較思想史を目指した。それぞれの汎イイズムが、民族的、宗教的、地域的に異なる背景を持っていたことは想像に難くないが、それだけでは思想交流は生まれにくいはずである。彼らを結び付けた問題意識とは何かを明らかにする必要がある。

こうした研究は、比較思想史への貢献となり得ると同時に、地域主義・構想を思想史として描き出すことの稀な国際関係研究においても、新たな視座を提供することになるはずである。さらに、ともすれば「地域とは何か」という地域の特殊性に収斂しがちな地域主義思想の研究に、国際関係史の文脈における比較研究という分析視角を導入する

ことで、その共通性や普遍性の側面から考察することを可能とする。

3. 研究の方法

本研究では当初、汎ヨーロッパ構想、汎アジア主義、ユーラシア主義を取り上げ、各国で渉猟した史資料に立脚しつつ、三者の生成過程、それぞれの地域的文脈、思想としての共通性と相違、国際関係史的文脈、権力と結び付いた時の政治的機能のそれぞれのレベルで分析を行うことを企図した。

研究計画立案時には、上記のような視角から書かれた研究は少なかったが、本研究が進行する過程で、ネットワーク史観から戦間期汎イイズム(特にアジア主義)を捉え、相対化しようとする研究成果が相次いで登場した。その結果、研究計画遂行時に連携を企図していた他のプロジェクトとも非常に有意義な研究交流が可能となり、刊行された研究成果のみならず、研究会やシンポジウム、研究者間の交流を通じて得られた成果は、下記に挙げる論文や学会発表にも少なからず反映されている。

本研究で得られた成果はそれぞれの段階で、論文、ワーキングペーパー、学会報告として刊行、発表していくことを予定していた。これは(査読、刊行に時間を要するもの以外)ほぼ実行されている。

4. 研究成果

本研究は第一に、汎イイズムには同時多発的に出現する時期とパターンがあること、これが主に3つの時期に大分できることを明らかにした。また、時期のみならず、担い手(19世紀のそれが帝国主義的政策を進めようとする側のロジックであったのに対し、戦間期や1950年代のそれは、権力に対する「異議申し立て」としての性格が色濃いこと)にも特徴があること、分析概念として「汎イイズム」という呼称は、自称ではなく、あくまで否定的な含意を持つ他称として用いられてきたことを提示した。この問題提起は、大変刺激的であるとして、内外複数の学会や研究会で活発な議論を喚起した。

第二に、戦間期の汎イイズムには、何を紐帯とするかという差異こそあれ、それ以上にヨーロッパ主導で作られてきた国際秩序に対する批判、アンチテーゼとしての意味があることを明らかにした。そして、具体的代替案にこそ欠くものの、それらの構想には、異なる民族や宗教の共存を可能とする広域地域主義構想とも呼び得る問題提起が含まれており、戦間期の汎イイズムが19世紀後半のそれとは大きく異なる性格を持つことが明らかになった。

本研究では、これらの汎イイズムの比較研究を試みたが、そのための予備段階として、日本の汎アジア主義、ハンガリー、トルコ、中

央アジアで流行した汎トゥラン主義、中央アジアとトルコの汎イスラーム主義、ロシアのユーラシア主義を取り上げ、それぞれの運動家・思想家たちの交流とネットワーク形成の様相を描き出した。その結果、それぞれの汎イズムが、従来の理解とは異なり、自己完結的な民族主義やナショナリズムではなかったこと、そこに上記のような共通の問題提起があったことを実証することができた。

これらの成果は、既に日本語と英語それぞれで学会にて発表し、一部を論文、ワーキングペーパーとして刊行しているが、目下2本の英語論文として執筆中であり、近日中に投稿予定である。

しかしながら、研究計画立案当初に計画していた汎ヨーロッパ構想については十分に踏み込んだ検証を行うには至らなかった。これは、本研究計画遂行中に新たに出版されたヨーロッパ統合の理念研究、中欧構想に関する研究成果等をも取り込みつつ、改めて検証する必要のある課題となっている。

研究計画立案当初、西欧近代に対する批判としての要素の中に、あるいは交流の副産物として、もともとはヨーロッパ・アイデンティティを持っていたロシア知識人の対アジア観の変容を捉えることを考えていたが、研究遂行中にこのテーマに関する優れた概説書『ロシアのオリエンタリズム ロシアのアジア・イメージ、ピョートル大帝から亡命者まで』が刊行された。そのため急遽予定を変更し、翻訳と解説執筆を通じてこの研究成果を広く紹介することで学界に貢献したいと考えた。その結果、本訳書は『読売新聞』の書評を始めとする各メディアで高い評価を受け、今秋にも『ロシア語ロシア文学研究』を含む学会誌に書評が掲載されることが決定している。

とはいえ、20世紀初頭から戦間期にかけてのロシアのアジア観の変遷は、それ自体が独立した大きな研究テーマであるので、本研究のサブ・テーマというにとどまらない今後の一層の研究の深化が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Yukiko Hama "Russia from a Pan-Asianist View: Saburo Shimano and His Activities," *Ab Imperio*, 2010/3, ppp.227-243;

浜由樹子「トゥラン主義とその時代 汎イズム比較研究のための予備的考察」IICS Monograph Series (津田塾大学国際関係研究所) No.18、2011年;

〔学会発表〕(計 2 件)

浜由樹子「汎イズムの伝播と思想交流 戦間期のロシアとアジアを中心に」日本国際政治学会トランスナショナル分科会、2012年10

月19日、名古屋国際会議場;

Yukiko Hama "An Ideological Crossroads: Pan-isms in Russia and Japan during the Interwar Period," ASEES 45th Annual Convention, Nov. 22, 2013, Marriott Copley Place, Boston.

〔図書〕(計 3 件)

浜由樹子「思想としての戦間期ユーラシア主義 ロシア思想のグローバル・ヒストリー」塩川伸明他編『ユーラシア世界1「東」と「西」』東京大学出版会、2012年、51-72ページ;

浜由樹子「ロシアにおけるアジア主義とユーラシア主義」松浦正孝編著『アジア主義は何を語るのか 記憶・権力・価値』ミネルヴァ書房、2013年、166-185ページ;

デイヴィッド・シンメルペンニンク=ファン=デル=オイユ、浜由樹子訳『ロシアのオリエンタリズム ロシアのアジア・イメージピョートル大帝から亡命者まで』成文社、2013年;

浜由樹子「訳者あとがき」同上書、285-293ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

浜由樹子(ハマ ユキコ)

研究者番号: 10398729

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者 ()

研究者番号：